

「我逢人」ということ

秋田県高泉寺住職 泉田泰雄

四十数年前に私は住職となりました。その当時の客間の裏は笹竹藪。住職となった手始めに、その鬱蒼とした竹藪に池を掘り立派な庭にしようと思い、作庭を始めました。庭池の為に地面を掘り、掘り上げた土を盛り築山にしようと思命に作業しました。こうした様子を興味深げに眺める二人の初老の方がいらっしゃいました。話かけられるでもなく、しかしどういいうわけか日参されていました。今思えば、新しい住職の本気を探っていたらっしゃったのかもしれませんが。その後三か月かけて、“心字池”風の築山がある庭へと仕上げました。私は縁側に腰かけしばらく悦に入っていましたら、お二人が初めて近寄り話しかけてくれました。ニコニコされながら「やあご住職、よくがんばった。いつ投げ出すかと見ていたが、よく掘り上げた、感服した。これまでの失礼をお詫びして、コンクリートで池の側面・底面工事と鳥海山の庭石を寄付したい」と申し出て下さいました。

私は大変嬉しく、お二人に心より感謝の言葉を何度も申し上げました。そして住職として赴くまでまるで接点のなかったお二人から、思いもかけない縁の不思議さを実感したことでした。

あれから四十数年の今、大本山總持寺・江川辰三禅師様は「我逢人」というお言葉を説かれます。禅師様は「人に逢うということは仏に逢うということなのだ」とお示しです。そのお言葉に触れる度、「かつて私なりに住職としてまた仏の御子として生き様を示したからこそ、“我逢人”のご縁をいただき“仏に逢う”が如くお二人に逢うことが出来たのだ」と思うのです。

すでにお二人共黄泉に旅立たれてしまわれました。現在私は朝、目が覚めると「ああ今日も目が覚めた、ありがたい。今日はどんな“我逢人”が待っているのか、どんな縁があるのか」とお二人とのかけがえのない出逢いを振り返りつつ、改めて仏の御子としての生き様を心に定め、ゆっくりと起き上げるのです。